

# 古庭園のダイナミズム

川崎 雅史<sup>1</sup>・山口 敬太<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 教授  
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 助教  
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)

本稿は京都の古庭園の中に共有できる風景におけるダイナミズム（動的感覚）の観察を行ったものである。岩倉実相院の借景庭園の砂紋がみせる平面的図像の動きとその背景、京都の清水成就院における大地形のシルエットの流れやうねりによる立体的な躍動感覚について考察した。以上より、視線の誘導のみならず動的な風景を生み出す背景にある静的風景の存在や、動きの気配を感じさせる地形構成などの仕組みを評論した。

**キーワード：** ダイナミズム, 岩倉実相院, 清水成就院

## 1. はじめに

本稿は社寺の伝統的な庭園の風景におけるダイナミズム（動的感覚）の観察を行ったものである。筆者等は、バロックの意匠を契機として、特定の広場や建築意匠の風景の中に見られる衝動的ともいえる大きな動き（動的感覚）を感じさせる見方として、風景のダイナミズムを提案した<sup>1)</sup>。本稿ではこの試論に立って、対象の観察を京都の古庭園に広げ、実証的な評論を進めるものである。はじめに、京都の岩倉実相院の借景庭園における砂紋がみせる平面的図像のダイナミズムを考察する。さらに、清水成就院における大地形のシルエットの流れやうねりによる立体的な躍動感覚を評価する。

先行研究<sup>1)</sup>の主要な評価から、図像的な意匠に基づく視線誘導のみならず、動的感覚のある風景を生み出す要因として、事前背景を構成する静的空間の存在や、動きの気配を伝える地形構成の仕組みなどについて考察し、ダイナミズムの見方についての検証を進めたい。

## 2. 砂紋のダイナミズム -岩倉実相院の庭園-

岩倉実相院は、京都北部の岩倉の急傾斜扇状地において山地斜面付近の敷地に位置する寺院である。実相院の庭園は比叡山の借景庭園として有名な東側の枯山水の石庭と、西側の斜面側奥の山肌に沿う池泉回遊の山水庭園がある（図1）。後者の山水庭園は自然の山裾をそのま

ま庭園として活用したもので特化した意匠は見当たらないが、建築からありのままへ続く庭園である。この両者の庭園の風景は全く性質の異なる風景を呈する。しかしながら、実相院建築は、両者の庭園を併せ持っているに固有性があり、重要な意味をもつと考えられる。この2つの庭園の関係性がダイナミズムをより先鋭化させているからであり、その観察を以下に記す。

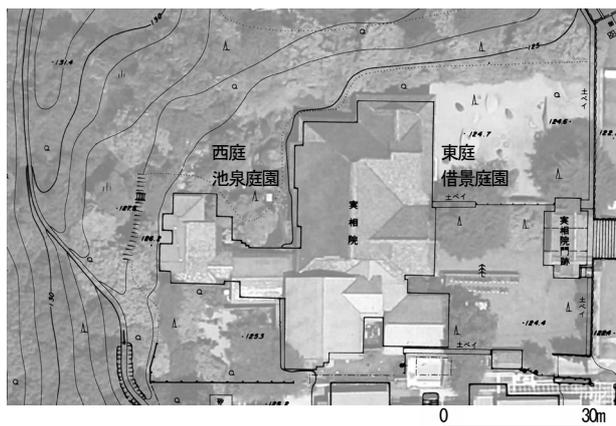


図1 岩倉実相院庭園の配置  
（「1:500 京都市現況平面図」と Google の航空写真を基に作成）

### 1) 砂紋の力動性 - 枯山水の借景庭園 -

主要である東側の借景庭園における、客殿の縁側からの風景の構図は、上方側は、借景となる東方にある比叡山系の山並みが中心となり、下方側は枯山水の庭園が構



図2 砂紋の風景 - 岩倉実相院・庭園 -

図の多くを占めている（図1）。

上方側は、両側の大きな立木が、山並みの一部分を借景として切り取っている。この借景はこの場所から約12キロの遠景の距離にあるため、自然のテクスチャや動きの印象は極めて薄く、ついたての様であり、円通寺と同様に重ね絵的で静的な印象を与える。遠景の自然そのものが持つ動きは感じられない。

このような借景と庭面への視線は、庭面敷地と階段下の道とのレベル差が約1.8m、庭面から土塀の高さが約1.8mの敷地形状が土台になっている。石組みの多くは土塀の近く、縁側の視点からは庭の遠い場所の中心付近に集まって山並みと合わせていることから逆遠近的な構成となり、風景に占める砂面の割合は極めて大きく占めており、とくに視点に近づくにつれて大きくなる。海を見立てる砂紋の表情がすべてを背景にして詳細に視認できるように作られた庭である。



図3 実相院・縁側からの鑑賞

海の見立てとしての砂紋であるが、実相院の大きな面に描かれた紋様は独特の力強さと動的な感覚を感じさせる。大きな波の楕円を描く紋様、石組の周囲に渦巻く小さな波の紋様など、遠くへ向かって大きな波紋の広がり

と流れを壮大に表現している。これはカンピドリオの広場の紋様と同様に、借景の比叡山や石組の落ち着いたある静的な風景を背景にして、その意識の中心は砂紋のもつ流動のダイナミズムへ向かうことになる。その意匠は、視覚的な流動の効果を通じて、見立ての精神性も加わり見る人の意識に大きく働きかけている。

## 2) 自然による穏やかな気配 - 見立てとの接点

ダイナミズムの風景を衝撃的にしている背景には、遠方に見える静的な山並みと、西側にある穏やかな自然そのものもつ微少ではあるが隠れた動きの気配が存在することに注目したい。これは西側の山裾と池泉庭園から流れくる自然地形そのものの気配であり、柔らかい地表面の表情や植栽のもつ緩やかで微少な動きを感じさせる。

このような微少な動きの感覚は東山の山裾にある門跡寺院にもいくつか見られるが、枯山水のような人為的な意匠と接続して動的感覚を増幅させる機能をもつ。これが実相院の固有性であり、他の対象には見られない風景である稀少である。

平面の配置（図1）を参照すると、東側の庭園の北側には、廊下が接しており、この廊下を通じて、借景庭園からも山裾から続く植栽が見通すことができる（図4）。ここで2つの庭の風景は緩やかに接続している。ほんの僅かの接点であるかもしれないが地形と自然植栽の流れからくる緩やかな動きの気配が、図像的な象徴としての主庭園の砂紋をより衝動的な砂紋のダイナミズムへと揺り動かしているものと考えられる。



図4 2つの庭をつなぐ廊下と植生

## 3) 砂紋の変動

砂紋は、気象をはじめ一定の変化がある。社寺の指導のもと造園業者によって維持管理がなされているが、その意匠の変化によっては紋様のダイナミズムは減少することもある。平成25年より、ワークショップ型の作庭が実施され、その意匠は見立てとして強い紋様や山の表現がなされたが、むしろこの意匠は借景の山並みとの関係性が強くなり、個々の要素は抽象度の強い表現力を持つが極めて静的な印象となり（あるいは精神性へ強く働

きかける)、動的感覚の印象は弱くなっていると考えられる。

### 3. 地形のダイナミズム - 清水寺成就院 -

本章では、前章の図画的意匠と柔らかな自然の背景が特化する実相院と対比して、大地形のシルエットや山肌の立体的様相そのものが強いダイナミズムを与える対象である清水成就院の庭園の風景について評論する。

#### 1) 山容のダイナミズム - 地形が巻き上げる力 -

成就院は、池泉回遊式庭園であり、京都の名勝庭園として代表的な成就院は、文明年間に願阿上人により創建された清水寺の境内の北に位置する本坊であり、今日の成就院の建築及び庭園は共に元禄以降のものである<sup>3)</sup>。庭園の作庭者について確かな資料は残されていないが、相阿弥作・小堀遠州による補修とも松永貞徳の作とも伝えられている<sup>4)</sup>。江戸時代の作庭書である『築山庭造伝』(1716)には、「典雅温淳体(てんがおんじゅんてい)」「庭のてい ゆたかにのどやかなる姿」と述べている<sup>4)</sup>。のどやかな優美さを評したものであり、自然の山並みと庭の絵図が表現されている。

これらの作庭評価は、雄大さからくるのどかなで静かな風景に対する評価であるが、その一方で先鋭的に動的感覚を与える風景が存在する。そこには大地形のスケールが与えるダイナミズムの効果がある。

筆者等は、既往研究<sup>2)</sup>において、複数の山系の地形が視覚的につながり、シルエットや山肌が長く連なることから一体性のある山容の見えが生じ、圍繞感についての指摘をした。さらに、長く連なった山系の様態のあり方を詳細にみると、その固有な景観の効果が明らかになってくる。

ダイナミズムの風景は、室内から北側の縁側へ出て庭へ踏み出した際に広がる。縁側の視点場近傍まで山並みが連なり伸びやかな山容のシルエットは、なだらかな連続性があり、仰角で概ね9度前後である。しかしながら、緩やかに縁側視点場に近づいた場所で急激にせり上がり、一挙に巻き上がる印象を与える。その変化は仰角で20度近くになり、その勢いは縁側に立つ人の視線を一挙に上方へ誘導する。音羽山系の壮大さは、入口の門で眺めの体験を経験しながらも、縁側での体験は全く異質であり、衝動的に起こる。身体の延長としての地形を改めて動的感覚として感じ、そこから再度全体の山容のシルエットや立体的な地形の肌理を躍動的な視線の流れとして把握し直し、地形がうねる様態を体験することになる。



図5 山容のダイナミズム - 成就院庭園 -

以上のダイナミズムの風景の体験は、庭園と音羽山の地形関係(図参照)を参照し、近隣で高い山系の傍に庭園敷地が位置することに起因していることにより一端を説明することができる。参道から表門をみた際に見える音羽山系の風景は静的な印象を与え、庭園の中で情動的な動きを見せる山容とは異なる山容の風景に変化する。

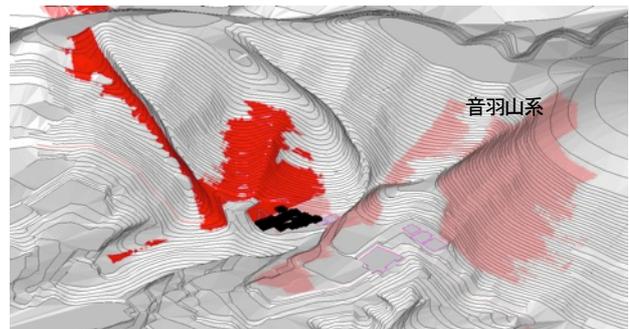


図6 成就院と音羽山系(参考文献2)より一部引用)

#### 2) 内包と拡大の風景

はじめに目にする建築内部の視点から切り取られた庭園の風景は、それだけで一つの静的な景観としてのスケールと様相を成立させている。すなわち、北側書院の開口部を通して見る景観においては(図7)、山容は視認できず、庭園内の植え込みの中、低木および敷地内の作庭要素のみで風景が構成されている。

したがって、近景での鑑賞に対する小スケールの独立した庭園の風景を成立させている。しかしながら、それらのデザインは、庭園内の木々のスケールと遠近のバランスから背景の音羽山の山並みへ無理のないつながりになっており、連続する地形面の基盤の上に、風景が拡大するための準備としての意匠が施されている。さらに、山容と庭園を結びつけている庭園の要素に庭園内と谷を隔てた遠くの山には石燈籠があり、添景による風景を結び付ける借景の代表的な構えを形成していることが指摘されている<sup>5)</sup>。



図7 内包の風景 -書院の中から眺めた庭園-



図8 拡大の風景 -縁側から眺めた風景-

このように拡大へのシナリオは周到に準備されている。先述した園側に踏み出した際の山容のダイナミズムの風景は、このような建築内部の小景観へ構成的にも足し合わせる形で拡大した景観へと変化する。回遊を済ませ、建築内部に戻るとまた縮小し、景観は内包する景観に戻ることになる。

また、庭園を出てダイナミズムの経験を生じた後、遠くに見える右手と左手の尾根の交差する方向には、穏やかな地形の流れの収束点であるもう一つの落ち着きのある静的な風景が見える。内包された庭園、地形交差の静的な風景を背景にして、ダイナミズムはより先鋭になる。

#### 4. さいごに - 古建築への展開 -

本稿では2つの古庭園にみる風景のダイナミズムについて評論を進めた。工学的には分析しにくい現象論的な考察でもある。しかしながら、バロックが持ち得た衝動的な強い感覚と共通するように、自然や大地との関わりを伝統的な意匠として巧妙に取り込んだ風景の情動性の一部を把握し、その見方の検証は一步進んだものと考えている。

今後の課題として、昨年の発表会で一部口頭発表した、

バロックのメルク寺院における内部意匠のダイナミズムの観察を行い、京都の古建築の内部空間に広がる情動性とを対比的に検討したいと考えている。京都角屋の古建築には、障子模様、開口部、欄間などに直線幾何学の集積のような意匠の展開が見られる。しかしながら、それらを背景にして一瞬にして強い動的感覺を与える風景が存在していることも確かである。今後、そらの観察を深めていきたいと考えている。

研究の対象が稀少であることから、見方の検証と共に対象の発見についても発表会で議論をいただければ幸いである。



図9 メルク修道院の内部空間



図10 島原角屋の風景

#### 参考文献

- 1) 川崎雅史・山口敬太：風景のダイナミズム，第9回景観・デザイン研究発表会，2013.
- 2) 山口敬太・中島功・川崎雅史，京都の古庭園における地形的圍繞の構成と眺望景観の特性，土木学会論文集D, Vol. 65, No. 3, pp. 317-328, 2009.
- 3) 重森三玲，重森完途：日本庭園史大系 第23巻 江戸時代初期，pp.6, 社会思想社，1972
- 4) 上原敬二：築山庭造伝前編解説・前編，pp. 99, 加島書店，1973
- 5) 久恒秀治：京都名園記（上・中・下），pp. 456., 誠文堂新光社，1967.